

流されずに生きる

津守 眞

戦争という大波からの解放

昨年日本の戦後六十年にあたり、テレビ、ラジオ、新聞など、いろいろの形で歴史が語られた。原爆や空襲、玉砕、沖縄など戦場を直接に体験した人や、その遺族たちの話は悲痛で、六十年経っても、昨日のことのように戦争を思い起こさせられた。そのわりにはどこまで本当に歴史が反省されているのか、疑わし

くなることもあった。

六十年というのは、それに幼少期を加えてほぼ人間の一生の年月であり、長寿の時代になってとくに、一生の間に歴史の転換を経験するチャンスも増えたと言えよう。

私は、日本陸軍最後の二等兵である。戦争に敗れたとき、二等兵は捕虜としてアメリカに連れて行かれ重労働をさせられると、古参の下士官たちに言われ、私

共は心配した。実際に起ったことはそうではなかった。私は無事に家に帰り、家族と再会し、大学に戻った。もう二度と兵隊に行かなくてもいいとわかったとき、私は心から自由を感じた。

六十年を経て、情報化の時代、歴史認識についても、さまざまな見解が飛び交う。

現在の私共にはつきりしていることは、日本は第二次世界大戦に敗れ、無条件降伏をし、軍備をもたない国として国際社会に復帰できたことである。異論もある。どこまで国際社会がその考えを維持できるのかについて、世界には違った考えがある。しかし、理想としてあれ、それが現実となり、日本がその最先端を担う役割を歴史の中で与えられたこと、永久に戦争放棄を宣言した国に生きているのはなんと恵まれたことか。

幼児の保育と教育の世界に身を置く者は、その中であってどう考え、どのように進めばよいのか。

子どもが毎日を幸せに生きられるように、子どもの

心の願いに応え、心身を労してゆけばよい。戦争の時代もそうである。これもはつきりしている。

昭和二十年十月、戦争が終わって直後に、早くも再刊された倉橋惣三『育ての心』の序文は、「国敗れて、いちばん気の毒なのは子どもである。がまた、いちばん希望をもたせるのも子どもである。済まんねといった心苦しさと、たのみますよといった頼もしさと、——」から始まる。戦後六十年の出発点である。そのとき幼児だった子どもたちがいま六十歳を超えた。あの時、この人を思うとき「済まんね」と言われ、「たのみますよ」と言われたことに立派に応えた人たちが今の日本をつくっている。

あのときすでに大人で、軍隊の上の方で威張っていた人たちもいる。逆に、職も名誉も失って、歴史を深刻に反省した無名の人たちも数多くいた。そういう人たちが入り交じって戦後の六十年がつけられてきた。

六十年経って世界の環境は変わった。権力に遠慮



し、恐れる傾向はいつの時代にもあったし、現代もまたそうである。常に変化する情報化の世界にあつて、人間の落ち着いた日常生活を保つことが真実を洞察する知恵を育むのではないか。子どもの存在と保育の営みがそれを助ける。

奔流のような

アメリカの力の蔭で

現代の世界に生きる人は、どこかでアメリカと向き合う。明治維新、第二次世界大戦と、日本人には、外でも内でも、アメリカは大きな存在であり続けた。そのテーマは、私には無謀なように思える。しかし、戦後六十年の早い時期にアメリカに留学し、幼児教育を専攻した私は、いままた考えざるを得ない。

戦後直後に私が学んだのは、コメニウス、ペスタロッチ、フレーベルの人間教育の系譜で、幼児教育はその線上にあつた。倉橋惣三の幼児教育の考えもその

系譜の上にある。フレーベルの後、アメリカの幼児教育はフレーベルをどう引き継ぎ、どう改革したのかを、わたしは山下俊郎先生に尋ねた。当時愛育研究所の教養部長だった山下先生は直ちに書棚からヴァンデウオーカーの『アメリカの教育における幼稚園』を取り出して、この本を知っているかねと私に尋ねられた。それは一九〇八年の出版だが、その後の歴史を記したものはなかった。その空白を埋めることがその後の私の研究課題のひとつとなった。

間もなくアメリカに留学した私は、アメリカの進歩主義教育の実際に触れて、お茶の水女子大学附属幼稚園の遊びの保育に共通することを肌で知った。一九四八年（昭和二三）に文部省で刊行した保育要領も共通な考え方だった。私が幼稚園の歴史を英文で書いたのは一九五三年である。論文主査であったDr. フラワーは、アメリカの学生が関心をもたない幼稚園の歴史にどうして私が興味をもつに至ったのか、感心して尋ねられたことは忘れがたい。彼女はそれから間もなく自動車

事故で亡くなった。

一九五三年のある日、ミネアポリスにあった幼稚園教員養成学校のミス・ウツズスクールで長年教えておられたアボット姉妹にサンデーデイナーに招かれた。

一九一〇年頃からのアメリカの進歩主義教育を身をもって生きてきた人である。多弁で、アメリカの幼児教育の生き証人だったのに、私は自分の論文を書くのに忙しくしていて、沢山質問があつたのにといまだに心を残している。人はいつの時代にも本性、自己中心である。そのため多くの貴重な機会を逃している。帰りがけに書棚から何でも好きな書物をあげると言われて、スーザン・ブロウ訳、フレール著『母の遊戯と愛撫の歌』を頂いて帰った。私の書棚にいまも大事にしている。アボット姉妹と小さな食卓を囲む落ち着いた歓談の中で、アメリカの進歩主義教育はフレールを否定したのではなく、フレールの精神に戻ろうとしたのであることを確信した。一九世紀末から二〇世紀初頭の、エリザベス・ピーボディからはじまるア

メリカの幼稚園運動の時代から考えると、アメリカ社会は幾度か変貌した。彼女の幼稚園運動の動機には、一八六〇年の南北戦争の奴隷解放運動があつた。アメリカの幼児教育には、人間をひとしく人間として尊重する精神が流れている。コンコード学派の哲学に傾倒したエリザベス・ピーボディは、フレールの幼稚園をアメリカ各地に普及させるのに奔走した。私の著書、「幼稚園の歴史」に、アメリカの幼稚園運動に尽くし、一九世紀を生き抜いたピーボディの章の最後に次のように記した。「一八九四年の正月のある日、彼女は外出先から帰ると急に疲れを覚えて床に横たわった。外には電車の通る音が聞えていた。恐らく、エリザベスの親しくしていた人たちは電車の音を聞かずに先立つたであろう」と。現代ではアメリカの自由のための戦いは、世界に広がる戦争のもとと見なされることも多いが、アメリカが高く掲げた自由は、アメリカの青年だけでなく、明治の日本の青年の夢となった。

一九六〇年代、アメリカとソ連の科学競争の時代に

なり、アメリカの幼児教育は急激に変化した。私の留学は二年足らずの短い期間だったが、その間に養われた印象は強く残り、アメリカ社会が変化しても私の認識は進歩主義教育の時代そのままに保存されていた。

次々にアメリカに留学された若い人たちが聞いて、行動主義の考えに傾斜していった様子を知り、私が物知り顔にアメリカの幼児教育を語っていたことを恥ずかしく思ったこともある。

流れ寄るものにやさしく

アボット姉妹を訪問した頃、私はミネアポリスのD氏夫妻の家庭に泊まって大学に通っていた。D氏はデパートの家具売り場に勤めておられた。第二次世界大戦直後のアメリカは世界の恒久平和をどのようにしてつくれるかに強い関心を抱いていた。D氏夫妻は、世には軍隊でなく、警察力があればよいと主張した。「世界連邦」の組織に加盟していた。戦後の日本の軍隊の解体と農地改革を高く評価しておられた。軍隊と

いう巨大な組織の維持に必要とする費用は膨大で、それをもつと他のことに使ったら世界はどんなに幸せになるか、日本は良い例だといつも言っていた。D氏夫人は、華やかな女性で、ソプラノ歌手として若い人たちの間で知られていた。

世界連邦運動の指導的位置にあったノーマン・カズンズが広島を訪れたのは一九四六年だった。著書「それが人間の代弁者になるか」の「ヒロシマ」の章は次の文章からはじまっている。「私は『諦め』を予期していたが、すでに『再建』が始まっていた。『荒廃』を予期していたのにすでに『若い息吹』があった。私はヒロシマで原爆の破局を生き残り、命を取り戻した人たちが、更に重要なことは、人間と自分自身への信頼を取り戻した人たちに出会った。ヒロシマ市民たちは世界で最も美しい市をつくることを計画していた。」

「ほとんど信じがたいことだが、原爆を受けた人たちが、一、二の例外を除いて憎しみや恨みの感情をもっていないかった。」「個人的友情はいかなる政治国際情勢

をも超えて、また人種をも超えて人々の心に温かい有心を通わせる。」

D氏夫妻に連れられて、私は、ミネソタ州南部のグスタフス・アドルフス大学で行われたノーマン・カズンズの講演会に行った。私はいまも、署名入りの本

『だれが人間の代弁者になるか』を大切にしている。彼はその後何冊も著述をして、九十歳を超えて二〇世紀の最後まで生きた。

私はこれまで四度アメリカに行ったが、その度に、D氏夫妻は、私のレセプションに真っ先に駆け付けて下さった。一九八三年には日本に旅行し、二か月間滞在されて語り合うことも多かった。そのときに土産に頂いたのが、D氏夫人自身の著書、『性犯罪者たち』(The Sex Offender 1978)で驚いた。その本の序文に次のように書かれている。

「人々はしばしばあなたのような上品な婦人が性犯罪者にどうして関心をもつのかと尋ねます。知的には私は、長年、社会的に不利益を蒙った人々、犯罪行為の

ために差別を受けた人々に関心をもってきました。

白人の中流家庭に育った私は、自分とは違う種類の人々からは庇護され守られてきました。私はこの本を書く過程で、犯罪者の個人史に耳を傾けたとき、彼等と私の違いは偶然の育ちの違いであることを確信しました。性犯罪者は人々から見下され、社会から隔離され、この地上から消えてしまった方がましだと世間から考えられています。彼等は心の深くに悩みを抱いているのです。この問題を考えるのに加害者と被害者の両側を考えないと非現実的です。性差別と暴力とはわれわれの社会に浸透しています。女性に対して支配的であることが男らしいと考えられてきたのが私共の社会の歴史です。」「刑罰をではなく、治療を」というのがこの本の主題である。

これは幼児教育と無関係ではない。幼児教育が、人間と社会の広い視野を見失ったら、技術的にはそれでいいかもしれないが、だいたいなものを欠くだろう。

D氏夫人は私の養護学校をも訪問された。そのと



き、ひとりの男の子が部屋中走り回っていた。夫人は私を見て、その子について、また私のやり方について、いろいろと質問された。私の学校を訪問される外国のお客さまは、子どもについて相当の理解があるのが通常であるが、D夫人に私の保育をわかってもらうのは易しいことではなかった。長年の間に何十通も手

紙を往復しても、保育の実際の話となると、土と血がしみ込んだ歴史で、それを言葉で伝えるのがいかにむずかしいかを保育者は知っている。西洋人と日本人とは、子どもに向かう感覚が違うのではないかと思っ
てしまふ。

たとえそうであっても、理念が人をつなぐ。そして、人と人との直接の心の交流が平和をつくる。

一九九八年に、D氏夫人が亡くなったとの知らせを受けた。その二年前に、ミネアポリスの老人ホームに

私は夫人を見舞った。ご主人を亡くされて間もないときで、夫人はこの世のすべてを失ったかのように、だけれども顔も弁別できないのだと看護の人の話だった。D氏夫妻がいかに互いに相手に傾倒しておられたかを私は目の前にした。夫人は私の顔を見て、言葉は発しな
いけれども、確かに微笑み、互いに抱擁して別れた。

流れの後の静けさの中で

心穏やかに、澄んだ気持ちで、ゆっくりと子どもに向かえるときは幸いである。

私は障碍をもつ子どもと付き合うことが多い。

歩かない、歩けない子どもと付き合って、私は歩行訓練を考えたことがない。無理して歩かされ、自分の足を叩いて泣く子どもを見ると可哀想になってしまふ。その子のもっと小さな喜びを、どうして、しっかりとゆっくりと叶えてあげることにエネルギーを使わないのか。

ちやうどこの原稿を書いているときに、以前に私共の養護学校を卒業した子どもの母親から葉書を頂いた。無理してでも歩行訓練をしなければ、いまに体重が重くなって歩くことがもつと困難になるだろうと心配していた。私は、まず子どもが自分からはじめることに目を止めて、子どもが楽しく生活できるように考えた。葉書には、「今日は涼しく美術館から駅まで、ぶらぶら歌いながら歩いた」と報告されていた。

体重の重い子どもを抱いているとき、保育者は、どうしたらそのときを生き甲斐の時に転換できるか。具体的はどうするかはそれぞれに委ねられているが、その状況から早く抜け出そうとだけ考えている時にはそれがむずかしい。自分が解放されて、子どもと一緒に生活に積極的に向かえたときに、思いがけない新たな展開が生まれる。朝、親しい先生が待っていてくれるのも子どもの生き甲斐である。今日はこの人に抱かれようと思つて学校に来るのならば、その子を抱くこと

がだいじなときなのではないか。そう思うと一日が過しやすくなる。

ある日、かなりの時間、ひとりの子どもと過ごした後（それはときによつて孤独な時にもなるのだが）、ふとしたことからその子は私の腕から下りて大きなボールで遊びはじめた。まわりで遊ぶ子どもたちと一緒に、私共はゆつくりとその中に加わつた。素敵な一瞬だった。音を出して楽しむ子ども、造形でたのしむ大人と、保育の場は、大人も子どももそれぞれの時を積極的に生きられる不思議なときである。いろいろなことが起こり、決して一様に流れる円滑な時ではない。ぶつかりあつたり、いろいろなことが起こる故に生き甲斐がある。二十年近く前の、私の保育の日記のひとつこまである。同様のことがいまも日々続いている。

（保育研究者）